

作物名：果樹共通
 病害虫名：果樹カメムシ類
 チャバネアオカメムシ（学名：*Plautia crossota stali*）
 クサギカメムシ（学名：*Halyomorpha halys*）
 ツヤアオカメムシ（学名：*Glaucias subpunctatus*）



写真1 果樹カメムシ類の吸汁被害（りんご）



写真2 左からチャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ

1 被害の特徴と診断のポイント

- 5月下旬頃から収穫期にかけて、成虫や幼虫が果実を加害する。
- 幼果期に加害された場合：果実表面が吸汁痕を中心に窪んで奇形となる。被害が軽度の場合は、吸汁痕は収穫期に目立たなくなる。
- 果実肥大期に加害された場合：果実表面が加害痕を中心に緑色をともなって大きく窪み、内部の果肉が褐変する。
- 果実成熟期に加害された場合：果実表面が若干窪む程度だが、内部の果肉は果汁が抜けて白くスポンジ状（コルク状）になる。
- 果樹カメムシ類の吸汁による果肉のスポンジ状（コルク状）は、りんごのコルクスポット等の生理障害やヤガ（夜蛾）による吸汁被害と類似するので注意する。

2 生態

- チャバネアオカメムシ
 体長約10mm。光沢のある緑色で翅は茶褐色である。山林周縁部の落葉下で成虫越冬する。宮城県では、通常は年1世代発生する。
- クサギカメムシ
 体長約15mm。茶褐色の地に暗褐色の斑紋がある。樹皮下や家屋の隙間などで成虫越冬する。宮城県では、通常は年1世代発生する。
- ツヤアオカメムシ
 体長約15mm。全体として光沢のある緑色である。常緑樹の葉裏などで越冬する。詳細は不明だが、宮城県では越冬できず、関東以西から毎年飛来していると思われる。
- 果樹カメムシ類は夜行性で、日没後間もない時間帯で活動が活発となる。
- 宮城県においては、チャバネアオカメムシやクサギカメムシは、越冬世代は5月後半頃から8月後半頃まで、第一世代（新世代）は8月頃から10月末頃までは場に飛来する。
- いずれの種も、卵から成虫になるまでの期間は60日間程度である。

- カメムシ類の幼虫は翅が未発達のため飛翔できず、移動は歩行による。
- いずれの種も広食性で、果樹以外の植物にも寄生する。春から初夏にかけてはサクラやクワの実など、夏以降はスギやヒノキの球果などを加害する。
- ほ場への飛来数は山林の餌の量に大きく左右されるため、年次変動幅が大きい。

3 防除方法

- 果実袋の使用は、被害軽減につながる。ただし、果実が肥大して果実と袋が密着すると、袋の上から吸汁されることがある。
- 多目的防災網を設置する。
- ほ場内では、葉、枝の陰、樹の隙間等に潜んでいるので、枝を落果しないよう軽く動かして、飛来の有無を確認する。発生を認めたら、果樹カメムシ類に登録のある殺虫剤を散布する。

4 出典

(1) 参考文献

- インターネット版 防除ハンドブック リンゴの病害虫、日本ナシの病害虫（全国農村教育協会）
- 農業総覧原色病害虫診断防除編 第5巻、第6巻（農山漁村文化協会）
- インターネット版 日本農業害虫大事典（全国農村教育協会）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影



写真3 ヒノキ球果上のチャバネアオカメムシ卵塊
(ふ化前)



写真4 リんご葉上のクサギカメムシ卵塊
(ふ化後)



写真5 リんご果実のカメムシ類吸汁被害の様子
(左:吸汁によるくぼみが2か所みられる、右:吸汁された果肉がコルク化している)

